

[29]

氏名	邢 繼 萱 ^{しん じーしゅえん}
博士の専攻分野の名称	博士（文化交渉学）
学位記番号	東アジア文化博第80号
学位授与の日付	2022年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	東アジアにおける王爺祭の研究 —海洋博物館の展示と意義—
論文審査委員	主査教授 二階堂 善弘 副査教授 篠原 啓方 副査助教 吉川 和希 専門審査委員 名誉教授 中谷 伸生

論文内容の要旨

シン ジーシュエン（邢 繼萱）氏の提出した博士論文『東アジアにおける王爺祭の研究—海洋博物館の展示と意義—』は、王爺信仰とその展示について扱うものである。

東アジア海域で暮らす各民族の間には、緊密な交流が行われ、独特の海洋文化が形成されてきた。このような歴史的背景において発展した海洋文化の中の一つが海洋信仰による王爺信仰、すなわち「王船祭」である。「王船祭」とは、主祭神の王爺を祭る廟宇が主催し、境内の疫病や害を退散させるため、「建醮」が行われた後に、王爺像などの祭祀用道具を搭載する「王船」を海上に流しながら燃やす儀式である。「王爺祭」の儀式では、宗教信仰以外にも、伝統的な民俗芸術や儀式用品の歴史と伝承も含め、民衆生活の典型的な文化的特色が理解できる。また、各地に伝来した「王船祭」は、独特の地方文化、社会環境と融合し、文化や地域性などの個性的な要素をもつ多様な儀式を展開することになった。

本論文では、王爺信仰から誕生した「王爺祭」を具体的な東アジアにおける海洋文化の一例とし、その内容と伝承を検討する。

本論文の構成は、次のようになっている。

序論

第一章 研究序説

第二章 海洋文化研究の現状

第一部 東アジアにおける王船祭概要

第一章 東アジア地域における「王爺祭」伝播の背景

第二章 中国における王爺祭

第三章 台湾における王爺祭

第四章 日本における王爺祭

第二部 博物館における海洋文化の展示と王爺祭

第一章 博物館における海洋文化の展示状況

第二章 総合型海事博物館の実態分析—海科館を例に

第三章「王爺祭」の展示についての基本構想

結論

第一部の「東アジアにおける王爺祭概要」については東アジア地域、特に中国・台湾・日本の三地における「王爺祭」伝播の背景切り口として、「王爺」の起源と王爺祭の特色という両方面から全般的に王爺祭の歴史を研究する。まず、東アジア地域における「王爺祭」伝播の背景を巡って、王爺信仰の内容と王爺祭の起源を解明した上で、歴史的な王爺信仰の背景、地域による儀式の過程、各博物館における王爺祭の展示という3つの方面から台湾、中国、日本三つの地域における王爺祭を考察する。中国起源である「王爺祭」の風習は、17世紀ごろから海上貿易の規模の拡大とともに盛んになった華人の移民活動によって、相次いで日本と台湾、さらに東南アジアに広がった。各地に広がった「王爺祭」は、独特の地方文化や社会環境と融合し、文化や地域性などの個性的な要素を持つ多様な儀式と様相を生み出した。それでも、これまで代々伝承され、一世を風靡した王爺文化による「王爺祭」の生命力は、徐々に縮小していくことを否定しにくい。現代社会において衰弱した民俗文化の生命力を延ばし、改めて生気を充溢させることは、王爺祭の伝承について研究する価値でもある。現在の視点からいって、王爺祭の開催は、地方の集団凝集性が高められることのみならず、観光客を招いて当地の経済力を強くさせる旅行資源として扱われる。歴史の変遷とともに、信者による民間信仰の需要と団体活動の参与は、王爺祭の王爺信仰を一つの文化意識に進展させた。そして、このように形成された文化意識は、民間信仰を介して人間自身に影響を与える。

第二部は「博物館における海洋文化の展示と王爺祭」をテーマとし、まず博物館現在の展示動向と海洋文化の展示現状の両方面から博物館における海洋文化の展示状況を究明し、また台湾海洋科学博物館を一例として、「博物館の展示構成」、「海洋文化展示と王爺祭」および「観客による展示分析」三つの角度から全面的に総合型海事博物館の実態分析を行い、さらにこれらの研究結果を踏まえながら「実物とマルチメディアの同時展示」と「シナリオと認知学習」に基づき、「王爺祭」の展示についての基本構想を提出する。これまでの展示研究によって、王爺祭の展示を本論の課題として探求してみた。どのように展示するのが良いかの定説はない。そこで、本論において博物館学の観客研究を基礎とし、博物館の観客を対象とするシャドウイング調査を行い、観客の行動や評価を項目や指標によってそれぞれ分析した。また、このようにして得た観客のデータを博物館機能の評価への参照とした。そうした観客の行動によって、デジタル化の展示方式に対する観客の意向や満足度が予測できるようになる。調査した結果によると、博物館における観客のデジタル化展示への満足度は、

いずれも高かったのである。この結果、展示のデジタル化が、伝統的な展示方式では伝えられない抽象的な内容を観客に理解しやすい方式で展示できることが論証された。同様の展示場所においては、伝統的な展示手段に比べると、デジタル化展示による展示内容は、より一層豊富で、展示物に関わる文化の風貌を全面的に観客へ伝達できるようになる。すなわち、デジタル化展示の展示効果は、単なる実物展示の解説よりも優れていると言える。時代の発展によって変化した観客の生活習慣に応じて、展示のデジタル化は、博物館にとって避けられないことになるであろう。つまり、博物館は、民俗文化を発展させる主要な主役として、また、民俗文化に関する正確な知識を普及させる教育機構として、民俗文化に対して地域の連携を推進しながら、地域コミュニティの構築や地域経済の促進など、地域社会の構造を効果的に構築するためにも重要な役割を果たすことができるであろう。

本論は、東アジア地域の「王船祭」を中心に、海洋博物館の展示現状を考察しながら、海洋博物館における海洋文化、特に「王船祭」の展示を踏まえて、王船祭のような海洋民俗文化をどのように保存すべきかを探求し、「王船祭」についての踏み込んだ意義の解明と、博物館におけるその展示の可能性について核心的な議論を提示したものである。

論文審査結果の要旨

本論文は『東アジアにおける王爺祭の研究—海洋博物館の展示と意義—』と題して、王爺信仰の特質をまとめるとともに、それに関わる種々の資料を博物館で如何に展示するかについて論じた研究である。王爺祭の研究については、これまでも数多くの論文が発表されている。また、さまざまな資料をめぐる海洋博物館の展示についても、多くの研究があるが、今回、シン ジーシュエン（邢 繼萱）氏が提出した本論文は、王爺祭と博物館の展示を結び付けた独創的な研究をまとめており、非常に斬新な論文構成および内容となっている。主祭神の王爺を祭る廟宇が主催する「王船祭」は、疫病や害を退散させるために「建醮」が行った後に、祭祀用道具を舶載する「王船」を海上に流して燃やす儀式である。そうした「王爺祭」の儀式では、民衆生活に関わる伝統的な民俗芸術や儀式用品がつくられるが、本論文では、それらの民族資料を海洋博物館で保存し展示する方法とその意義について詳細に論じており、独創的な研究として高く評価できる。

第一部の「東アジアにおける王爺祭概要」においては、中国・台湾・日本の三地域を中心とする東アジア地域の「王爺祭」の伝播をめぐって、先行研究を咀嚼しつつ、適切にまとめており、「王爺祭」の研究としては手堅い内容であると言っておきたい。

第二部の「博物館における海洋文化の展示と王爺祭」においては、海洋文化の展示状況を具体的に究明しつつ、台湾海洋科学博物館を一例に上げ、「博物館の展示構成」、「海洋文化展示と王爺祭」および「観客による展示分析」の三つの角度から総合型海事博物館の実態分

析を行うなど、博物館展示の状況を要領よくまとめることに成功している。加えて、「実物とマルチメディアの同時展示」や「シナリオと認知学習」などの現代的な展示課題に言及し、「王爺祭」展示の基本構想を提出していることも評価された。従来の、そして現在の博物館の伝統的な展示手段を分析するとともに、デジタル化による複合的な展示手法を論じる主張は、民俗文化の知識を普及させ、民俗文化をめぐる地域社会の構造を効果的に構築する提案となっており、新しい視点を展開している。審査委員からは、博物館の現状分析が正確になされていることは評価できるが、将来の博物館のあり方とその展示手法についての言及が少ない、という指摘も出たが、全体として、独創的な論文構成になっていることが高く評価された。加えて、民俗文化に対する深い理解についても評価されたことを記しておきたい。

本論文は、東アジア地域の「王船祭」をめぐって、王船祭のような海洋民俗文化をどのように保存し展示すべきかを文化的、教育的な観点および博物館という仲介の施設を踏まえて探求した研究として独創的であると考えられる。シン ジーシュエン（邢 繼萱）氏は学会発表や論文などの業績も十分であり、これからも学術分野での活躍が期待される。

よって、本論文を博士論文として価値あるものと認める。